

# 阿嘉島の蝶 part 10

上林 利寛

AMSL 調理担当

## 阿嘉島で確認されたタテハチョウ科の迷蝶 3 種

Butterflies in Akajima Island, Part 10.

T. Kamibayashi

Three stray species of nymphalidid butterflies found at Akajima Island

迷蝶とは、その観察された土地には元々は土着していない種類のことで、他の地域から飛来した蝶や、その子孫のことを指します。国内では、台湾やフィリピンからの飛来が多い西表島や石垣島が迷蝶の楽園として有名ですが、阿嘉島でもここ数年間に数個体の迷蝶が観察されましたので、ここに紹介します。

中型のタテハチョウ、メスアカムラサキは、八重山諸島が国内での分布の北限と言われていますが、今回取り上げる 3 種の中では、阿嘉島で遭遇する確率の比較的高い蝶です(写真 1)。過去に阿嘉島で確認した個体は、雄 3 個体 雌 1 個体で、いずれも翅にキズのない新鮮な個体でした。以前、沖縄本島の末吉公園でも、新鮮な個体を目撃しています。これらは、発見された個体の新鮮さから、親となる蝶が飛来した場所で幼虫時の食草に巡り会い、一時的に繁殖したものと推測されます。というのも、幼虫の食草はスベリヒユ(スベリヒユ科)という野草で、阿嘉島でも畑の脇などによく見られるものだからです。ちなみに、島の人たちはこの植物を酢の物などにして食しています。

小型のタテハチョウ、アオタテハモドキも、国内での分布北限は八重山諸島だと言われています。雄は後翅の鮮やかな青色が印象的ですが、雌はやや地味な褐色をしています。また、発生する時期によって成虫の翅の裏側の斑紋が異なり、季節型(夏型と秋型)に区別できます。研究所の近くで採集した個体は、幾分、翅にキズの多い雄(季節型不明)でした

(写真 2)。縄本島泊港付近でも、雌の個体を観察しています。幼虫の食草は、イワダレソウ(クマツヅラ科)やキツネノヒマゴ(キツネノマゴ矛斗)などで、イワダレソウは阿嘉島でも海岸近くに多く自生しています。しかし、過去に確認した個体は、この 1 個体のみで、阿嘉島で発生したものかどうかは不明です。

大型のタテハチョウ、リュウキュウムラサキは、「リュウキュウ」の名に反して国内には土着していません。しかし、沖縄各地、特に八重山諸島では、冬季を除いて比較的良好に採集されるようです。雄、雌ともに美しい紫色の光沢をもつ個体が多いものの、雌には地理的な変異があり、翅の斑紋の違いによって、台湾亜種、フィリピン亜種、パラオ亜種、中国大陸南部亜種などと発生地に基づき複数に区別されています。阿嘉島で確認された 2 個体は、翅の斑紋から、いずれも台湾亜種(雌 1 個体、性別不明 1 個体)であることがわかりました(写真 3)。本種の幼虫の食草は、サツマイモ(ヒルガオ科)、ツルノゲイトウ(ヒユ科)、キダチハマグルマ(キク科)などで、エサとなる植物の多様性も沖縄各地で観察される要因の一つでしょう。

これら 3 種のタテハチョウは、八重山諸島以外の沖縄各地でもたびたび観察されているにも関わらず、定着には至っていないようです。その理由の一つは、八重山諸島とより北に位置する島々との寒暖の差にあるのかもしれない。



写真 1. タチアワユキセンダングサに訪花するメスアカムラサキ( )。1994年11月。

雄は翅に美しい紫色の光沢があるが、雌は全体にオレンジ色で、マダラチョウ科のカバマダラやスジグロカバマダラに擬態していると言われている。

写真 2. アオタテハモドキ( )。1997年5月28日。

写真 3. アゴノハマ近くの山中で茂みに身をひそめる台湾型のリュウキュウムラサキ(性別不明)。1994年11月。